

幼児期後期における両手操作の発達的变化について

－ ハサミによる「切り抜き」課題を用いて －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
劉 爽朗

本研究では、幼児期後期の子どもがプランニングの形成によって、道具の操作には異なる取り組み方を示すことを推測し、4歳から6歳の幼児59人を対象に、ハサミによる「切り抜き」課題を用いて、両手操作の発達的变化について3つの指標から観察した。また、課題に意味付与して提示した場合、課題の取り組み方に変化を生じることと考え、「指示的」条件と「意味的」条件を設定し、条件の変動による変化を検討した。結果として、3つの指標とも60ヶ月を境に、急激な変化が見られた。また、条件の変動による変化について、4歳代の子どもにおいて3つの指標とも大きな変化を示した。以上の結果から、4歳の子どもは両手の機能が分化し、「切り抜き」ができるが、プランニングができず、見通しを持った取り組み方ができないと考えられる。5歳になると、プランニングが形成し、課題に対して自分のスクリプトで取り組むことができること示唆された。また、4歳代の子どもに対して、課題の提示において適切な目的を提示することがプランニングの形成に助長し、効果的であったことが示唆された。